

シリーズ

弥生土器をつくろう！⑤ 弥生時代後期末編

弥生時代から次の古墳時代へと変化する時期には、ある程度広い地域で共通のデザインの土器が作られるようになります。特に大型化した墳墓などの祭祀で使われる土器にその傾向がみられます。

古墳時代前期に流行する「二重口縁壺」は、弥生時代の終わりごろから出現し、古墳時代初頭には装飾の多いものがみられます。祭祀用に発達した土器と考えられます。

唐古・鍵遺跡では、弥生時代後期末（3世紀ごろ）に作られた初期の二重口縁壺が出土しています。小ぶりの底部がつき、肩部に櫛描直線文と波状文の装飾がつけます。

古墳時代初頭になると、口縁部も波状文や円形浮文で装飾され、底部が丸底または尖り気味の底となることが多く、墳墓用のものは最初から底部に孔が開いたものもみられます。



唐古・鍵遺跡第115次調査

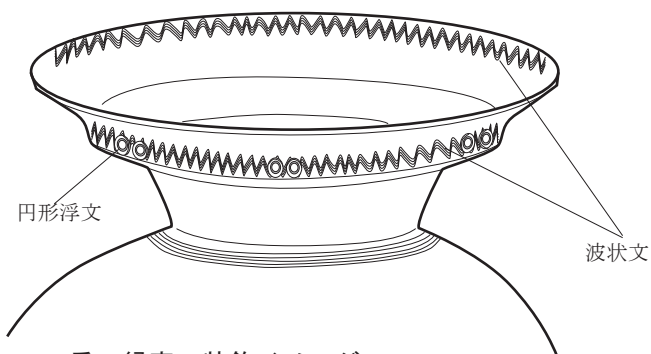
大溝（SD-101）上層から出土した土器

右端が二重口縁壺です。弥生時代後期末の甕や高坏などとともに出土しました。



唐古・鍵遺跡第48次調査出土

丸底の二重口縁壺（古墳時代前期）



二重口縁壺の装飾イメージ

二重口縁壺の典型的な装飾パターンは、口縁内面に波状文や羽状文を施し、外面にも波状文と円形浮文を施します。

※ペーパークラフトのデータは、

- ①無文（48次調査出土例をイメージ）のカラープリンター用データ
- ②無紋の茶色い紙用のモノクロデータ
- ③胴部に施文された例（115次調査出土例をイメージ）のカラープリンター用データ
- ④胴部に施文された例の茶色い紙用モノクロデータ
- ⑤口縁部にも施文された例のカラープリンター用データ
- ⑥口縁部にも施文された例の茶色い紙用モノクロデータの計6種があります。

モノクロデータは、茶色い封筒などをA4サイズに切ってモノクロ設定で印刷してください。